



## 医療支援活動報告

北海道大学医師会 会長  
北海道大学病院 院長

福田 論

北海道大学医師会長あてに原稿依頼が届きましたので、今回の震災での医療支援活動について写真を中心に簡単に述べさせていただきます。

まずはこのたびの東日本大震災で亡くなられた方に対し心からのお悔やみを、そして被災者の方々に心からのお見舞いを申し上げます。

決まるまで紆余曲折はあったものの、陸前高田市に3月20日から5月9日までの間、医師2名、看護師2名、薬剤師1名、事務職員2名の7名を1チームとして、10チーム70名を派遣しました（写真1ならびに<http://www.huhp.hokudai.ac.jp/>のトップ東日本大震災について－北海道大学病院の対応－）。延べで1,900人弱の患者さんが受診されました。

行き先決定の過程は詳細には述べませんが、志津川、石巻、気仙沼、大槌と変わる中、最終的に陸前高田市に決まり、長部地区の長部コミュニティーセンター内を中心に医療支援活動を展開しました。同センターの漁民センターを診療所にし、長部小学校体育館は物資の置き場として使用しました（写真2 a・2 b・2 c）。宿泊は遠野地区の介護センターに場所が確保でき、大変助かりました（写真3）。

あの状況の中で当然とはいえ、いわゆる自己完結型で、交通（当初はトラックとハイエース、落ち着いてからは花巻空港経由）・薬剤・食料・水・ガソリ



写真1

ン等々、すべて準備して行って帰ってこなければならぬので、物資の流通が浮ついた状況での手配は、事務方の迅速な対応なしでは不可能でした（写真4 a・4 b）。

また今回は主として内科系医師、精神科、小児科のリクエストでしたが、外科系の方でも行きたいと言っておられる方もいたようですが、内科系医師に絞り派遣しました。地元岩手出身で是が非でもと言ってくれた小児科医にも加わってもらいました。被災者はもちろん大変ですが、余震、場合によっては被曝の可能性も否定できない中、チームとして行ってくれた70名には感謝しています。現状を見てもまだまだ収束していない状況ですが、道としての派遣であり江別市立病院チームに後を引き継ぎましたが、5月23日には院内報告会・慰労会も予定しております。

被曝派遣チーム、受け入れも併せて、今回の派遣については、国、都道府県、学会、医師会などの情報が錯綜し、決定がスムーズ・スマートにできるような単純かつ強力なリーダーシップが必要であると痛感した次第です。



写真2 a



写真2 b



写真2 c



写真3



写真4 a



写真4 b